一

未明の刻、磐音は深閑とした静寂の中に瞑想し、坐禅を組んでいた。坐禅堂に響くのは、時折り放たれる警策の音のみだ。

結跏趺座。

背筋を伸ばして、顎を引く。

指導僧の道世のすり足が磐音の背に止まり、磐音は合掌低頭する。

ぴしり

禅堂の空気を裂いて警策が響く。

ここは北国街道っから外れた曹洞宗大本山、吉祥寺の修行堂である。八つの起床とともに禅僧たちの一日が始まる。

永平寺は越前の領主波多野義重が道元禅師に帰依してこの地を寄進した。そこで道元は、寛元元年に家は宇治の興聖寺から門弟らを率いて、下向してきた。

永平寺と改められたのは三年後のことだ。

道元はこの地にある十年、門弟の指導に精魂を傾けた。が、元々北陸の地は蓮如の吉崎御坊建立によって、真宗信仰が農村の隅々まで浸透していた。それゆえ、曹洞宗が格別この地に勢力を張ることはなかった。

だが、元和元年、徳川家康は「永平寺諸法度をくだして、永平寺を曹洞宗寺院の総取締に命じた。このことによって能登の総持寺とともに曹洞禅の中心になったのである。

磐音は、若狭街道から古戦場の賤ヶ岳の先で北国街道に移り、加賀の国を目指して北向してきた。

道々、磐音の頭裏に迷いが生じていた。

すでに奈緒には千両もの値がついていた。

磐音が手にし得る金子ではない。

軍鶏の試合でなけなしの百三十両を使いおｋんだ磐音の懐には、路銀が八両余り残っているだけだ。

加賀金沢で奈緒に再会してもなんの手立てもなかった。かえって未練が募るばかりではないか。

そんな吹っ切れない思いを抱いて柳瀬、椿坂、中河内、板取、今庄、湯尾、鯖波、脇本、今宿、府中と旅してきて、府中城下で永平寺の托鉢僧と出会った。

そのとき、磐音は永平寺に参禅をしようと決心したのだ。

一乗谷から永平寺に入った磐音は、庫裏に向かい、参禅を願った。

許されたのは、諸国の曹洞宗から本山に留学している若い禅僧と一緒になっての参禅修行だった。

永平寺七堂伽藍の一つ、法堂を見上げる修行堂で十七人の若い僧たちと寝起きを共にして、坐禅、作務、食事、読経と決められた日課をこなす。無言の内の修行は、慣れぬものには厳しいものだ。だが、禅僧を目指す若い僧たちには当然あるべき時の過ごし方だ。磐音も無言の行に心身を晒して、内なる自分と対面してきた。

＜心を存して悟をまつことを得ざれ……応接の時はただ応接せよ。静坐を得んと要せば、ただ静坐せよ＞

指導する道世も、修行僧に問おうとはしない。自ら無我の境地で答えを見つけることを静かに命じていた。

作務の合間にふと自然に目をやると、錦秋を織りなす楓や紅葉が磐音の心に語りかける。

（見よ、自然の営みを）

磐音は淡々と静かな時を堪能するように過ごした。そして、明日には、参禅を許された十日を迎えようとしていた。

磐音は、ただ時の流れに心身を委ねて、無言の十日を終えた。

度立ちの朝、道世が山門まで磐音を送ってきた。

「御坊、ありがとうございました」

頷いた道世が無言の内に合掌した。

磐音もまた合掌して、短い修行と縁を感謝した。すると道世が、

「どちらに向かわれるな」

と訊いた。

「金沢に参ります」

「ならば、今宵は大聖寺の実性院にお泊まりなされ。永平寺の道世からと申さば、許されよう」

道世は、禅寺のある地では永平寺の名を出して修行を続けよと、泊まり先まで心配してくれた。

磐音は再び合掌した。

北国街道に戻った磐音の頭上から白い物がはらはらと落ちてきた。

北の国はすでに冬を迎えていた。

歩く度に雪が重く、激しく降ってきた。

この夜、磐音は道世から紹介のあった、加賀の支藩の一つ大聖寺城下にある実性院に泊まった。

この寺は、かがの曹洞宗の名刹にして、荻の咲く寺として知られているそうだ。

だが、すでに雪の季節を迎えて、荻の花を見ることはできなかった。その代わり紅椿が雪を被って磐音を迎えてくれた。

この十日余り慣れた生活を磐音は実性院でも繰り返した。

翌日、雪は上がった。

その昼下がり、磐音は小松城下から安宅関へと差しかかり、豊後関前藩の出した関所手形を示して通された。

関前城下を発つとき、御直目付の中居半蔵が、

「そなたには入用なものであろう」

と持たせてくれたものだ。

磐音は日本海を左手に望みながら街道を進んだ。

小松から金沢城下までは、六里十八丁あった。磐音の足ならば、無理をすれば深夜の内に辿りつけない距離ではない。

どうしたものかと考えながら歩を進めていくと、後方から馬蹄の響きが聞こえてきた。

前田家の急使かと磐音は路傍に寄った。どうやら先ほど通った関所役人のようだ。六尺棒を掻い込んだ役人や小者を従えた陣笠の武家が、

「どけどけどけっ！」

と言いながら通りすぎっていった。

「何事が起こったべえか」

「なんでも関所破りじゃそうな」

あとから来た馬方と旅の商人が話しながら、まだ立ち止まる磐音の傍らを過ぎていった。

磐音はふと北国街道を外れて、さらに海沿いの道に入った。再びちらちらと雪が舞い出し、鈍色の海に落ちて消えていく。

磐音は菅笠を目深に被り、海鳴りを聞きながら加賀へと向かった。峨々たる岩場が海に突き出す断崖に、磐音を追い越していった役人たちの姿が小さくあった。

関所破りを探しているのか。

磐音が海ベリを歩いて行くうちにいつの間にか姿がきえていた。

磐音は岩場に這い登ってみた。するとかすかな人声が風に乗ってきた。若い女の泣き声も混じっていた。

泣き声は切り立って海へと落ちる崖の途中から聞こえてきた。

好奇心に駆られた磐音が降り口を探す。岩場と岩場を伝うとなんとか降りられることが分かった。

磐音はゆっくりと岩場を這い降りた。

悲鳴が短く聞こえ、制止の声がした。

「それがし、役人ではない」

そう言いながらなおも岩場を降りると、中年の男が両手を広げて、背に女たちを隠していた。

「安宅の関を破った者がいると聞いたが、その方らか」

磐音の声はのどかに響いた。

「お侍、旅の方だね。見ないふりして行ってくだせえ」

「事と次第では行かぬこともない。そなたの背には娘たちがいるようだが、何者だ」

男がしばし答えを迷い、磐音の顔を見ていたが、

「越前の村から金沢の遊里に売られていく娘でございますだ」

「そなたは女衒か」

「早く言えばそんだ」

「娘らは望んでのことか」

「だれが女郎になることを望むものか。家族のため、年貢のために仕方なしに身売りする者ばかりだ。娘っ子の家に一文でも高く支払えるようにするのがわしの務めだ」

女衒は言い切り、娘たちも頷いた。

「お侍、役人たちを見かけなかったか」

「先ほどまで岩場を見ていたが、いずこかへ去っていった」

磐音の言葉に娘たちが安堵の声を洩らした。

「なあに、そう油断させておいて釣り出すのが奴らの手だっぺ。夜を待つしかあんめえ」

と女衒が言い、

「娘を売らねばならねえようにしておいて、関所は越えてはならねえだと。そんな話があんだか」

と憤った言葉を吐いた。

磐音は洞窟に下りた。すると女衒の背後には六人の娘たちがいた。

「城下に逃げ込めばなんとでもなる」

と女衒が言い切った。

「おまえ様はどこへ行かれる」

「身売りされた許婚を求めて金沢に参る」

「冗談はいわねえもんだ」

女衒が起こったように言った。

「冗談など申さぬ」

女衒が再び磐音の顔を見据え、ほんとのことかと訊き返し、

「旅の徒然だ。わけをはなしてみべえ」

と言い出した。

「力になってくれるというのか」

「事と次第ではならないでもねえ」

磐音の言葉に、今度は反対に女衒が応じた。

磐音は洞窟の片隅に座すと、改易された家と父親の病のため自ら苦界に身を落とすことを奈緒が考えた決意から、長崎、小倉、赤間関、京とたらい回しに転売されていった経緯を話した。

女衒の職を知り尽くした上、娘たちのためになんとかしようという侠気の男と、身売りされる娘たちの境遇が磐音に話をさせていた。

聞き終えた女衒の口から深い吐息が洩れた。

「なんと途方もねえこんだ」

女衒は腰に吊るした瓢箪を外すと、黙って杯を差し出した。

磐音もその好意を受けた。

「われも長えこと女衒商売をやってきたがよ、奈緒様のように数か月のうちに肥前から加賀まで身売りされ、値が千両についた女など聞いたこともねえ。この娘たちの二十倍、三十倍の値だ」

「崖の小石が転がり、他の石に玉突きして岩崩れを起こすように、奈緒どのも成り行きでそうなったのであろう」

「なんともな」

磐音は空になった杯を女衒に返した。

「お侍、おれは愛蔵と申しやす。加賀の女郎屋のことは知らねえではねえ。なんぞ道々考えるべえ」

「坂崎磐音と申す。よしなに」

「奈緒様が途方もねえ値でうられるとしたら、買い取る妓楼は一、二軒でがんす。まんず見当はつく」

「それだけでも助かる」

「おらも心強いだ。夜中に旅すんのによ、おらだけでは頼りねえでな」

愛蔵はそう言うと手酌で瓢箪の酒を飲んだ。

磐音たちは日が落ちるのを待って断崖の岩場から這い出し、海沿いの町に戻った。まず、愛蔵が持参していた道中用の提灯を持った磐音が先に立ち、なにか異変があればあとから来る愛蔵たちに明かりを振って合図をすることになった。

日が落ちた北国街道には関所役人どころか、往来する人の姿も見かけなかった。

二手に分かれて一里ほども進んだあと、愛蔵たちが磐音に追いついてきて合流した。すると娘たちの顔にも安堵の色が浮かんだ。

許婚が同じ境遇にあるということが娘たちに共感を抱かせていた。そして、磐音に同情もしていた。

「お侍さん、加賀百万石の遊里は、遠く元和元年の昔からありやんしてな、海から浅野川に船があがってくるようになって、上方の品々が集まりだすと、船着場の周辺に妓楼が剣を連ねたというこんだ。時代が下って、寛永年間には、『於町中傾城並び出会茶屋堅く御停止之事』というお触れとともに、風呂屋遊女などの売淫を禁じてもおりますだ。だがな、こればっかりは、男と女がいる限りなくならねえ。停止が出るとちいとはおとなしくなるが、またぼこぼことぼうふらのように湧いてめえります。浅野川の母衣町、卯辰、観音坂下、洩尿坂、小立野口と広がり、犀川河岸でも河原笹下町に茶屋や出会宿がございますだ」

愛蔵は物知りのようで、金沢の遊里の歴史を問わず語りに喋り出した。

娘たちは自分が売られていく先の話を後ろに従いながら聞いていた。

「この娘たちが奉公する先は、浅野川の母衣町にございますだ……」

愛蔵は、母衣町の遊里の風景を活写した。

＜其ほとりは風情青楼多く、城下の目さへ忍ぶ里、もの多くかくし、表に蕩子の魂を動かし、昼夜入びたる人多し＞

という古書の一節を披露した。

「お侍、おらの知る観音坂下の藤田屋なぞは、名がつけられた座敷には上座もあって、畳の縁は南蛮渡来のびろうどに家具も建具も豪華なもんだ。ただな、藩のお許しがあっての遊里じゃございません。楼に上がった客は酒を飲んでも高歌放吟などはもってのほか、密やかに遊ぶだよ。これはこれで雪の日なんぞは風情もありまっしょ」

愛蔵が喋りながら、なにごとか考えている風情を見せた。

「なにか気がかりなことでも」

へえっ、そこですよと愛憎は言葉を止めて、

「いくら加賀百万石と言えば、京の島原、江戸の吉原の公許の遊里の格式にはかないまっせん。となると奈緒様をどこの妓楼が千両の大金で買い取るかと思案してきたのですがねえ、どうにも思いあたらねえ」

愛蔵は首を捻った。

磐音も愛蔵に指摘されれば、うーんと唸るしかない。

「京の話は嘘であったか」

「花折峠まで追っ手がかかったところをみると、まんざら嘘でもあるめえ」

愛蔵は指摘した。

「お侍、ひょっとしたらだがな、奈緒様の行き先は、遊里ではねえかもしんねえぞ。加賀は禄高百二万石だけあって、家老職も五万石を筆頭に一万石を超える重役方がたくさんおられるだ。加賀の家臣団でも格式があるのは本座者といわれる利家様以来の主従でしてな、その中でも前田家の分家筋など八家は、田舎大名なぞ及びもつかねえだ。ひょっとするとここいらあたりが手を伸ばされるか」

と愛蔵言った。

「妾ということか」

「いえね、あくまでおらの推量だ」

と言った愛蔵は、

「それもこれも金沢に着けば分かるこっだ」

と言い切った。

夜明け前、磐音一行は、野々市という地で北国本街道に戻った。

そこで愛蔵は提灯の明かりを消した。

「城下に潜り込めば、役人も手出しをしねえ決まりだ。いやさ、妓楼からそれなりの金が町奉行なぞに渡っているということですよ」

朝霧の中を人声が伝わってきた。かがり火も見えた。

「愛蔵どの、どうやら最後の待ち人がおるようだ」

磐音は路傍に娘たちを伏せさせた。

「ここまで辿り着いて、こいつは困った」

愛蔵が顔を顰めた。

風が吹いて朝霧を吹き流した。すると街道の入り口を四、五人の役人が固めていた。その一人が磐音たちに気づいたようだ。槍の先でこちらを指していた。

「愛蔵どの、役人たちはそれがしが引き受けた。裏道伝いに城下に逃げ込め」

磐音はそう言うと、愛蔵が手にしていた杖を借り受けた。

「お侍、おまえ様は大事ないか」

「心配いらぬ」

「なら、暮れ六つに犀川大橋でお会いしましょうか。それまでに奈緒様のこと、調べておきますだ」

「頼む、行け」

「へえっ」

愛蔵はその声を残すと娘たちと林の中に駆け込んだ。

磐音はそれを見届け、懐から手拭いを出して菅笠の下の面を覆った。そして、杖をてにゆっくりと立ち上がった。

「村からの逃散者はいかがいたした！」

先頭を走り来る陣笠が叫んだ。

磐音はその声を聞くと彼らに向かって走り出した。

「手向かいする気じゃぞ」

小者たちが手にしていた槍のお穂先を磐音に向けた。

磐音が杖を一閃させて陣笠の役人の頭を打撃した。

「それ、突け！」

「おのれ、しぶとい奴めが」

磐音が役人たちの間を掛け抜けたとき、路傍に倒れ臥した陣笠らが痛みに呻き声を上げていた。

磐音は杖を捨てると街道を金沢城下に向かって走り出した。